
蜜柑色の手紙

ヨウヘキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蜜柑色の手紙

【Nコード】

N6676M

【作者名】

ヨウヘキ

【あらすじ】

今年もまた、あなたの手紙が届きました。

夕闇の中、私の家の前に一人の郵便局員が立っている。彼は右手に封筒を一枚持っていた。

「毎年、ごくろうさまです」

私がそう言うと、彼はにこりと笑い、その封筒を私に手渡した。彼がバイクで立ち去るのを見届けてから、私は家の中に入った。

買い物袋を机に置き、椅子にゆっくり腰を下ろす。そして、封筒を開いた。オレンジ色の便箋が一枚。そして、懐かしい丸文字が目に入った。

『やあ、元気だったかい？ 今年もまた君がこの手紙を見てくれて嬉しいよ。美里の様子は怎么样い？ そういえば、今年から小学生か。あの子は君に似て小柄だから、合うランドセルがなかなか見つからなかったかもしれないね。』

仕事の方は怎么样い？ 君はなんでも一人で背負いこもうとするから、それだけが心配だ。あまり無理をしないでほしい。じゃないと、僕みたいになんかパンクしちゃうから。

そうそう。ここの病室の窓から蜜柑畑が見えるよ。実をつけるのはまだ先になりそうだけど、窓を開けると僕の大好きな香りがするんだ。君がつけていた香水によく似ている。柑橘系の、甘酸っぱくて温かい香り。目を閉じてそれを感じていられる瞬間が、今の僕の唯一の楽しみなんだ。その一瞬だけ、僕は悲しみや、恐れみたいな感情の類を忘れることができるから。

残り一ヶ月。その間に、僕はどれだけの手紙を君達に遺せるかわからない。伝えたい言葉はたくさんあるのに、時間がそれを待ってくれないのは、僕にとってひどく酷なことだ。だから会いに来てほし

い。一年に一度でいいから、美里と一緒に。これが、僕のたった一つのわがままだ。
ちよつと長くなってしまったね。読んでくれてありがとう。じゃあ、また来年。』

私は手紙を読み終えると、そばにあつた小箱を開けた。中には同じ色をした便箋が四枚入っていた。あなたが亡くなってから、もう五年が経つ。私はいつたい、あと何枚、あなたの遺してくれた手紙を見ることが出来るだろう。願わくは、この箱がいっぱいになるまで――そう思い、私は箱を閉じた。

今年もまた、会いに行きます。あなたの好きだった、蜜柑の花が咲くところに。

ふと、どこからか蜜柑の香りがした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6676m/>

蜜柑色の手紙

2011年1月16日03時46分発行